

日、独の文化交流機関の国際交流基金とゲーテ・インスティトゥート（G I）が最近、「平和のための文化イニシヤティブの役割——日独からの提言」と銘打ったシンポジウムを開いた。

世界各地で完全な平和とは言い難い「戦争未済」の状況が現出している。アフガニスタン、比ミンダナオ、インドネシア・アチェ、ボスニア、ルワンダ……。こうした地域

人々の内面の安定がカギ

で文化はどのような役割を果たせるか考えようというのが狙い。両機関は紛争地で文化事業を実施しており、幾つかの事例が報告された。

国際交流基金によるアフガン伝統のイスタリフ焼の支援事業では、実際に携わった砥部焼伝統工芸士の白瀧八洲彦氏らが現地を訪ね、またアフガン陶工を日本に招き、窯の造り方、焼きの入れ方、新しい造形品の開発など

を指導した。同氏は「イスタリフ焼がアフガンを代表する特産品となって地元が潤い、地域復興の一助になればと願っています」と語った。

ドイツ側はアフガンの首都カブールで、07年以來開く演劇祭と映画祭について報告した。G Iのアフガン所長リタ・ザクセトゥーサンさん（女性）は「アフガンの文化の再構築が他の分野と同様に重要なのは、文化があっ

てこそアイデンティティと社会的価値を再定義することができるからです」と語った。

日、独のアプローチの違いは国民性を反映している面白いが、大戦敗戦国である両国が「平和のための文化の役割」を共同で探ろうという試みも意味深い。

米国のブッシュ前政権は「民主主義の拡大」を掲げ、上から押し付ける形で価値の伝播を図り、

手痛いしっぺ返しを受けた。日独両国は相手に寄り添い、広い意味での文化をテコに民心と社会の安定を図ろうとする。米国の文化政策に対するアンチテーゼでもある。

ただNGOや民間団体と違って、独立行政法人の国際交流基金やゲーテ・インスティトゥートは課題も抱えている。不安定地域の事業だけに、人命にかかわる事態になれば「なぜ派遣したのだ」と世論の批判を浴びる。

文化がどれだけ平和に貢献したかの成果を客観的な統計で出しにくいのも、この種の事業の理解を広める上でネックだ。

シンポに私も参加して感じたのは、紛争後の信頼醸成や個の誇りを高める上で文化は極めて重要で、人々の内面の安定と

充実があつてこそ、諸施策は実を結ぶ。文化を政治、経済、社会の脈絡で考え、使いこなしていく。グローバリズム時代の文化のありようを示唆する。（専門編集委員）